

発達障害のある児童が在籍する学級での支援員のあり方

- ある小学校の事例を通して支援のあり方を考える -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
福田 央子

本研究の目的は、ある事例を手がかりに、発達障害のある児童が在籍する通常学級における、支援員による支援のあり方を考えることである。

現在、通常学級に在籍する発達障害のある児童への支援員として、特別支援教育員や、学生ボランティアが配置されている。従来の支援員のあり方は、個別支援と集団の尊重という二つの視点においてとらえられてきた。しかし、そこから見えるものは、大人による一人一人の子どもへの支援であり、子ども同士の関わりが見落とされている。子ども同士の関わりへの支援を考えると、そこから、子ども同士が関わり合う力を育てるという新しい視点の必要性が浮かび上がる。

H19年に特別支援教育が開始されたが、その実践は未だ試行錯誤の段階にある。発達障害のある児童への支援にあたるものとして、支援員の役割は非常に重要であるが、この支援員の役割についての研究は少なく、現場での支援のあり方は支援員や教師の経験に委ねられているのが現状である。

そこで本研究では、筆者が付添いボランティアとして関わった発達障害のあるA君の事例を呈示し、まずA君の在籍する通常学級の他児らが、A君とどのように関わり合い、他児らがどのようにA君を理解しているかを考察した。その上で、支援場面で観察されたエピソードを、個別の支援、集団の尊重、関わり合う力を育てる、の3つの視点をもってとらえ直すことによって、支援員に求められる支援のあり方を考察した。

関わり合う力を育てるという視点を加味したことによって、発達障害のある児童の個別支援のための介入について、新たに、その時機を見計らう、介入せずに見守る、という支援のあり方が見出だされた。また、子どもたちにとっての支援者と教師のもつ役割の違いと、他児への支援もまた、重要な意味をもつ可能性が示唆された。加えて、担任と連携を強める上で、長期的な展望をもって、介入の時機や具体的な関わり方について、より多様な支援のあり方を呈示できる可能性が見出された。また、発達障害のある児童の状態だけでなく、他児らの他者理解の発達や集団の発達の状態に応じて、支援員に求められる役割が変化する可能性が示唆された。

以上のことを踏まえて、通常学級における支援員は、個別の支援、集団の尊重、関わり合う力を育てる、の3つの視点をもち、発達障害のある児童だけでなく、他児への支援や、担任との連携を含めた学級全体を対象とする支援を行うことが必要である、という考察が得られた。